

メンズ”

あいあう

第三号

3

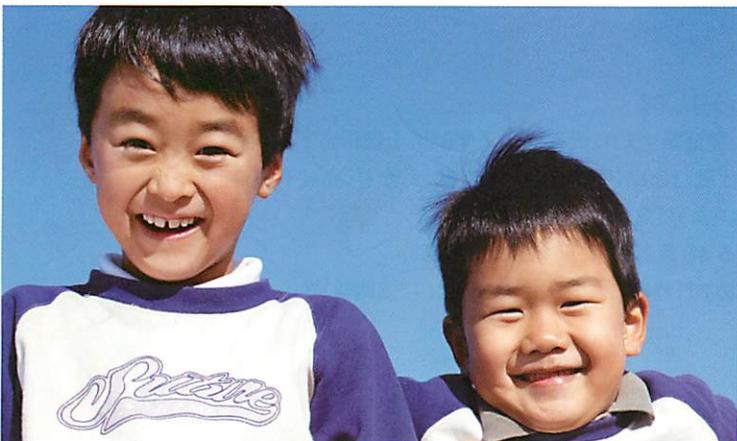
寄稿1／人間を人間と見ること難し 真城 義麿

インタビュー／男の更年期 石蔵 文信さん

寄稿2／伝統と苦情～なまはげ事件の教訓 金子 雅臣

報告／男女両性で形づくる教団をめざす協議会

エッセイ／女のささやき 八田摩矢子 おしらせ／坊守の規定の変更について



人間を人間と 見ることに難し

大谷中・高等学校長
真城 義磨

大谷中・高等学校は一九九七年から中学を、二〇〇〇年から高等学校を男女共学としました。一八七五年（明治八年）に「京都府下小教校」として創立以来、百二十年以上男子だけの生徒を教育してきたことを考えると、かなり画期的なことです。一九九〇年頃から委員会を作って、二十一世紀の大谷中学・高校の教育はどうあるべきかを考えました。学校の建学の精神というか、真宗の教えに基づく人間観・教育観による教育理念に照らして、

どうあるべきかを随分議論しました。そして、男性女性がある違いを認め合いながら育ち合うことこそ大谷にふさわしいと、男女共学の方向性が決定しました。それ以前の、男子校の時代は、教員も圧倒的に男性が多く、女性は専任では養護教諭と事務・用務職員だけで、あとはわずかに非常勤講師の方の中にいたくらいです。ですから、時に女子学生が教育実習に来た時などは、生徒のみならず教員も失礼な眼差しで



【プロフィール】 ましろ よしまろ

1953(昭和28)年、愛媛県生まれ。大谷大学大学院修士課程修了。
真宗大谷派善照寺住職。1997(平成9)年より京都、大谷中・高等学校長。
著書に『つながりを生きよう』『念仏者と平和(共著)』
『あなたがあなたになる48章』(ともに東本願寺出版部)、
『真の人間教育を求めて』『危機にある子どもたち』(ともに法蔵館)など。

見、接していたのではないかと思えます。なにしろ、千数百名の男性の中へ、数名の女性が入るわけです。私も、宗教科の実習の女子学生を担当して、この女子学生を男たちの失礼から保護しなければなどと考えて、本来必要のない心配をしたり特別扱いをしていたように思います。結果、実習生の方は「人間と人間」というところに立っているのに、私たちが「男と女」と見ていることを知らされました。「女性だから配慮を」と親切に考えていたつもりが、特別にしか見ていなかったのです。

対象をどう見、どう語るかという時に、自らの立ち位置があらわになります。対象の「人」を「女性」と見る時、「学生」と見る時、「門徒」と見る時、おのずと見ている自分には限られたどこかに立っています。そういう点で、私たちは「〇〇の私」という主語でしか、見たり考えたり語ったりできませんね。「理知的合理的に考える私」とか、「男の私」とか、「真宗の僧侶としての私」とか、「先生の私」とか、時には「〇〇であろうとする私」などもあります。それはすなわち、相手を自分の設定した位置関係の中で見ているのでしよう。公平中立に見ることなどできません。男としての私をいただいている私は、そこに立って男の眼で見るとありません。公平なつもりで、私は偏った目で見ているのです。

私たちは、どうも人間を何かの物差しで分けて、どちらかに分類したい傾向を持つていくようです。そして対象と自分との関係を、何らかの分類（ジャンル）の中で位置づけたい。そしてできればそこにある優劣や上下も知りたい。また「被害者と加害者」とか「差別者と被差別者」とか分けて、そしてどちらかを正しいとして、一方が他方を責めたり言い訳したりもします。その分類は、多重でもあります。例えば、私たちがハンセン病に苦しんでおられる人ということと、その男女と、どちらを優先して見ているのか。障害のある方々を男・女と見ているか。死体はどうか。

つまり、誰かを見る時に、「人間」としてのその人よりも、その人の「属性」を見ているようです。所有（何をどのくらい持っているか）とか、その人の持つ機能（何がどのくらいできるのか）とか、地位とか、症状とか、身体的特徴とか。（性は人間の属性なのでしょうか、本体なのでしょうか。）そういう「属性」でとらえた人間のことを「人材」と呼びます。人材とは、私の都合というところに立って、そこから相手を見た時の、価値付けされた人です。つまり私にとっての材料としての人です。異性を人間と見ているのか、人材と見ているのでしょうか。では、私たちは自分自身のことはどう見ているのでしょうか。ためし

に「私は〇〇です」を二十ほど書いてみると、そこに出てくるのは、私の好みや得意なこと、所属など、私の周辺のことや属性に関することが多いですね。

自分の立ち位置を優位に保ちながら、他者を自分の都合の良いように見ていき、できればそれをシステムや時代の風潮にしたい。相手からも、その（自分の都合の）位置関係で接して欲しい。女性を、自分の都合によい「男性でない人間」と見たいのかもしれませんが。誰がどうして女性にスカートをはかせたのでしょうか。どうして青を男性の色としたのでしょうか。政策的に与えた位置づけがあるのでしょうか。さまざまな人間誕生の神話の中の女性の描かれ方（イブやパンドラなど）に見られます。また、男女の性差と、それにもとづく様々から経験的に、生活の知恵としてできあがっていったものもあるのでしょうか。

私たちは身近な二、三の例を一般的傾向として語ったり、誰かの持論や私説をよく考えないまま伝えることで、誤った風説が広がっていきます。テレビなどで「だから女（男）は〇〇なんだ」などの発言があると、鵜呑みにして信じ込んでしまいます。

その人のもつ属性の違いがその人の人生を大きく左右し制限することも一方の事実ですが、その人自身が本来もっている人間性に目を向けたいものです。

男の更年期

インタビュー

いしくら ふみのぶ
石藏 文信 さん

[大阪大学医学部准教授]

●インタビュー／岩根 ふみ子 [女性室スタッフ]



男に更年期があるの？

多くの方はそんな反応をするであろう「男性更年期外来」。今回は、そんな耳慣れない診療科を国内で立ち上げ、医療の現場から現代の男性を取り巻く様々な問題と向き合っておられる石藏先生にお話をお聞きしました。



発行/ソシム株式会社

—— 「男もつらいよ、男性更年期」という先生の書かれた本を読んで、男の人って大変なんだって思いました。男の人が自分のことを語るのとはとても難しいことだと言われますが、なにが邪魔してるんでしょうか。

石藏 プライド、メンツですね。それしかな

—— と思います、女性と違うのは。ウツは世界的に女性が男性より大体2倍ぐらい多いんですよ。でも、自殺する人は男性が女性の約2倍なんです。自殺とウツ病は非常に密接な関係があって、自殺する方の6割から7割はウツ病だというデータもあるぐらいなんです。単純に計算すると、ウツ病は女性の方が多いから女性の自殺者が多くて当たり前なのに、半分の男性の方が倍多いっていうことは腑に落ちません。2分の1が2倍になっちゃうわけですから。それはおかしいんじゃないかってみんな言うんですけど、ウツ病っていうのはお医者さんに来て診断されて始めてウツ病なんです。女性の方が敷居を飛び越しやすい、お医者さんにかかりいろいろ相談するんですよ。男性はウツ病になってるんだけど誰も相談せずに、もういきなり死にたいて話にいつちゃう。

—— ウツ病になって自殺する男性と離婚との関係はどうなんですか？

石藏 妻に死なれた男性の寿命は短いのですよ。夫に死なれた女性は長生きするんですよ。というところは夫が一人で生きていけない、自立してない男性が多いでしょう。お金を稼いでいるから独立しているみたいに見えるんですけど、まあ放ったらかしにされたらご飯も作れない洗濯も掃除も身の回りのことも出来ない、非常に弱い。実は女の人が支えてるんです。特に日本はそういう傾向が強いですね。「亭主元気で留守がいい」というのは、

—— 言い得て妙な言葉ですね。亭主元気で定年になると三食作らんならん。夫の定年前は奥さんは、昼は適当に食べ、夜も適当に食べてるんですよ。そういうのは夫にはわからないんですよ。家に帰って「なんでお前出かけるねん」とグチグチ言うから奥さんが縛られて体調も悪くなったりと、それが原因で離婚を選ばれるんだろって思います。高齢になると愛情云々っていうよりも自分の体調が悪いかどうかの問題になってくるみたいですね。

—— ウツ病になりやすい男性の年代はありますか？

石藏 一番多いのは40歳前後なんです。最近システムエンジニアリングといわれるコンピュータ関係の人たちのウツが増えてきてるんです。忙しすぎるんですよ。本当はインターネットができたら楽になるはずなんです。でも24時間情報が入ってくるから余計忙しくなるんです。17〜18時間っていう労働も可能になる。一人でも際限なく仕事ができちゃう。そうすると当然彼女をつくる暇もないわけですよ。一人の世界で全部できようになつたら便利は便利なんですけど、全く現実の世界に話し相手がない。自分をさげすみ相手もないので、そりゃあこもってしまいますよ。ウツにならない方がおかしい。ぼくはなつた人には「極めて人間らしいですよ。この忙しい世の中、ひよつとしたらウツにならない人の方がおかしいかもしれない」という話をよくします。

—— 診療にいられた人にいろいろ聞き出すのは難しいのではないですか。

石蔵 ほくはおしゃべりですから。話をどんどんとしていくんです。ウツの男性は喋らないんですよ。例えば、「どうされたんですか？」って言うと、「いや、ちよつと眠れないんですよ」って。眠れないのにわざわざ新幹線乗ってくるはずがないわけですよ。「じゃあ、いつからでしょうか」といろいろ聞いていく。「それだけ眠られへんかったら辛いでしょ。いろんな症状あるでしょ。あなたがここにいられた人は眠れないだけじゃないでしょ。辛い症状があるはずでしょ」と、ずうつと聞いていく。そして最後には「そんな症状だったら死にたくありませんよ」って。まあ死にたくなくても、「世の中から消えてしまいたいっていうことは考えますでしょ」って。「それは最近よく考えるんです」「それは普通の感情ですよ、それだけしんどかったら。そしてどこのお医者さんに行っても特に問題ないって言われたらそれはもう絶望的になりますよ」って話をしていく。そうすると「あ、この先生はよくわかってくれるんや」ということで、ほくは話ができる。

—— 先生は夫婦で受診することを勧められていますね。そのメリットは何ですか？

石蔵 二つあるんです。一つは、男性は大体軽めに言うんですよ。「ちよつと眠られへんだけです」「食欲はどうですか？」「まあまあ

です」と、こんな具合です。ところが、奥さんは「そんなことはない」っておっしゃる。「最近全然食べない」って。「睡眠は？」って聞いたら「何回も起きてる」とかね。奥さんと言ったことが違うわけです。どっちを信じたらいいかっていうと、それは横におるの方が確かにわかっている。ウツの人っていうのは自分を分析する能力に欠けてくるわけですよ。まず奥さんの意見を聞く。もう一つ大事なことは、ウツの旦那さんって案外わがままなんです。亭主関白で、「俺はこうや」っていう人も多いわけです。そうするとそういう方がウツになっていららしてキレたり、若干DVぎみの方もいらつしやるんですよ。本当にあっけらかんとした奥さんみいらつしやるけども、相手をする事によって同じようにウツになつて奥さんみいらつしやる。

そうすると「奥さん辛くありませんか？ 眠れますか？」と、場合によっては旦那さんを検査に出して、奥さんだけ置いていて本当のこと教えてくださいますよ。いろいろな愚痴がワアッと出てくる。「奥さんも辛いでしょ？」って言ったらシャキッとした気丈な奥さんでもすぐに泣き出す。「旦那さんも辛いけどこの旦那さんを世話するあなたも大変でしょう。申し訳ないけど旦那さんよりまだ健康だから、もうちよつと我慢してください。でもこういう薬あげとくから、この薬でちよつと楽になつて三ヶ月ほど旦那さんの看病を続けてください。その間にほくが何とかします」って言えば奥さんは耐えてくれる。旦那さんの症状を知り、その看病に奥さん

自身がまいってないか聞くことは非常に大事です。

—— 旦那さんだけが悪いってことはあんまりないんですね。

石蔵 十人に一人くらいの奥さんは治療してありますし、治療しないまでもカウンセリングをしている奥さんは非常に多いですよ。どんなに名医でもこういうタイプの人を治すのは時間をかけるしかない。お前はちよつと要領が悪すぎるって言う先生みいらつしやいますけど、話を要領良く整理をするっていうことはいいい事とかわからんですよ。患者さんは今の話をしたり過去に戻つたりするんですよ。医者としたら非常に苛立つんですよ。でもそれが患者さんなんです。混乱してるわけだけど、じつと聞いて筋道をちゃんと立ててあげるのが医者の仕事なんだと思うんですよ。

だからほくは好きにだけ喋らすわけですよ。そうすると当然時間が足りなくなつてきますよ。保険扱いにしてた時は、一日に一人しか新患を診ないって約束してたんで、半年待ちくらいになつたんです。お薬はなるべく使わない、そして検査もほとんどしない。それは患者さんにとつては非常に良い医療ですね。でも病院からしたらとんでもない悪い医者なんです。いま保険制度というものがひつ迫してきて、お医者さんも本当はゆつくり聞いてあげたいんだけど、たくさん患者を診ないと病院の収入にならない。いろんな

方に言われて、特殊な医療だから患者さんから料金をいただくことにしました。いちかばちか五万円にした。それでも来られる。定着率がすごい良いです。治療率も非常に高くなつていく。患者さんの意欲が違ふんですね。お金を出すっていうことが悪いように思うんですけども、ひよつとしたらいい効果も生まれる。タダ同然にすることが本当にいい医療を提供できるのかわかんない。

—— そうですね。本当にそうやって時間かけてちゃんと聞き取つてくださつて、仕事に行けなかつた人が行けるようになったら五万円というのはそんなに高くないと思いますね、お話を聞いています。

石蔵 最初のころに更年期なんかやつてる先生いないから、誰もやり方を教えてくれない。ほくも最初の患者さんは手探りでしたよ。どうすればいいんだって考えた時に、じゃあ患者さんに電話してみよう。それで次の日にどうですかと電話したりします。最初の日から二週間まで少なくとも4、5回、ちよつとやばいなと思つたら7回くらい電話します。すると電話することによって患者さんがすごく喜んでるのはわかるんです。そして一番苦しい時に電話をしてあげる。その二週間我々ががんばれば、あとはものすごく楽になる。一ヶ月もたてば電話をしないです。ほくはメンタルインテグレーションって言葉を使つて、精神的な介入をしていくわけです。つまり支えてるっていうこと。あなたを支え

ますっていう安心感。最初は不安なので、支えますよ。医者っていうのはすごいパワーがあるんですよ、医者っていうだけで。

—— 男の更年期が精神的なものに深く関係しているということを取らわかってやられたというよりも、患者さんと接していくなかで自然とそうなったということですか？

石蔵 その通りです。もう一つ良かったのは、病んでる方っていうのは呼吸器とか心臓に症状が出て、血圧とか心臓の心配をされるわけです。ほくは循環器の医者なので、その辺のケアができるわけです。高血圧の患者さんが来られて、メンタルの薬を調整していったら血圧が段々正常化してきて、結局降圧剤をやることも多いです。

—— 不安障害から血圧が上がるんですか？

石蔵 上がります。最初来られる時は血圧や頭痛、胃の調子が悪い、下痢ぎみと七つも八つも症状がある。半年たつたらほとんどなくなりません。経営者としたら、薬も段々減っていく、検査はしない、話は長い、それはもう最悪でしょ。でも今となっては循環器の専門で、心の問題ができるというのは良かった。

—— 更年期の女性も診られるんですか？

石蔵 先ほども言ったように男性に限らせていたいです。それで良かったのは、患者

が四〇、五〇代の中年のおっさんばかりで、しかも仕事帰りのような人が並んで、似たような患者さんがおられるわけです。だから待っていても違和感がない。でも夫と来られた女性の体調が悪い場合は、男性の治療の必要性から診ます。お子さんの不登校などが親のストレスの原因になっている場合はそのお子さんも診ます。でも、最初は非常に躊躇してたんですよ。子どもを診られるほど力量がないと思っただけです。だけど、精神科には行きたくないけど、お父さんを診てる先生やたら行くってことがあったんで、かからないよりマシやろと。専門にしている先生に失礼ですけど、行けと言っても行けへんのやらうちへ来さすしかないわけです。

—— だいたいそういう治療が出来るようになってきたから、話をしたり、軽い薬をあげると、子どもがキレなくなったりしておとなしくなる。そうすると家の中は落ち着き、お父さんもお母さんも落ち着いていく。四人のカルテがある家族もあります。最近では会社のストレスで割と配置転換とかでケアしてくれているんですよ。家庭はそれができないことが多い。家庭内がギクシャクしてもめ事が多くなり、最近では殺人事件も増えているようです。家族という縛りから逃げられないんですよ。学校でいじめられても「頑張って行きなさい」と言われてつらくなって自殺を考える。不登校の方がまだマシなのに。逃げる方法ではない家庭っていうのはかなりつらいのではないのでしょうか？

—— ということは夫婦間の暴力は多いんじゃないですか？

石蔵 身体への暴力は数えるほどです。でも言葉の暴力はしょっちゅうです。半分くらいはそうやね。例えば診察室でも、奥さんに「黙ってろ！」というような人がかなりいらっしやいますよ。「僕のところへ来たら絶対に夫婦喧嘩が増えます」とまず言うんです。症状が良くなって、もう大丈夫かなと思ったら、奥さんの味方するんです。例えば、奥さんも友達から温泉とか誘われるわけですが、全部断つてる。旦那さんに「奥さんが倒れたら、あなたも死にますよ。これから奥さんがいない練習をしましょう。とりあえず奥さんはドクター命令で一泊二日の旅行に行きなさい」と言うんです。そしたら家に帰って喧嘩になるわけ。「一泊ぐらいやったら餓死しませんでした。今度は二泊行きましょう」と、だんだん奥さんのいない生活に慣れるんです。案外奥さんがおらんのも気が楽かなという男の人も出てきます。奥さんもちよっと距離置かんとしんどい。

—— 男性の更年期って、そんなのあるの？ という反応の方がまだまだ多いかと思うんですが。

石蔵 医学的に言えば、男性の更年期はありません。ただ、ウツにも不安症にもなっていない、その一歩手前でウロウロしてる方が来ます。そういう方をほくらが診てるだけのこと

で、精神科、心療内科とあまり変わりはありませんし、どちらかというと中年期のウツ病を診てるというのが実際のところなんです。でも中年期のウツ病を診る心療内科ですと言ったら、患者さんはちよっと来にくくなるかもしれませんね。

—— 更年期っていうのは受診しやすいイメージを受けますね。

石蔵 何でも来て下さいと窓口を広くしておいて、知識を非常にたくさん持っておかないと、わざわざ来てもらう価値がないわけです。来院した患者さんはほとんど自分で診ますが、統合失調症や、癌であるという場合は専門科に紹介します。でも、大概うちに来る方はどこに行っても治らんかったっていう人が多いいんです。大事な外来だからやっていますけれども、男性更年期の定義は現在では難しいです。「原因は多分ストレスでしょう」それぐらいしか言いようがなくて。やっぱりコミュニケーション不足ですね。

—— コミュニケーションが苦手な男性って多いと言われますね。

石蔵 ほくは、コミュニケーションをはかるために外来で白衣を着せし、講演会とかではネクタイはしないようにしています。また、患者さんには奥さんとコミュニケーションをとるためや自分の健康のためにも料理を作ることを勧めています。



—— 男性と女性と関われるポイントでもありますし、料理の話題って盛り上がるんですよね。

石蔵 盛上がりですね。男性更年期の予防法が料理ってちょっとわかりにくいですけど、奥さんとのコミュニケーションですよ。だから家庭生活を大事にするっていう、そこを基本的に出てくる方はそんなに問題はない。社長でも専務でも家に帰ってきたら、ただのおっちゃん、お父ちゃんやという意識が必要で、いつまでたっても元社長元専務に引きずられて、なんか偉そうにしてるけど周りは誰も寄ってこないって状態になる、それが一番しんどいんじゃないかと思うんです。自然体がよ、もつと気楽にされたらどうですか。でも患者さんはお気楽に出来んから来てるわけで、そのお気楽にする方法をちゃんと教えてあげないといけないですよ。よく、頭が痛いからCTを撮ってもどこも悪くない。それで先生が「大丈夫です、気の問題ですよ」つ

て言う。でも気の問題って「気」に問題があるわけやから、それを解決せなあかんわけです。問題を一緒に解決しましょうよ、そうしてリラックスしてどうすればいいんだって考えるわけです。

—— リラックスの仕方がわからない。

石蔵 リラックスしましょうって言われても困るでしょう。嫌なのに体鍛えなあかんってスポーツジムに一生懸命行く。病院に来られて「嫌なんですよ」って言うたら「行くの辛いです」って言うから「辛いことは止めましょう。楽しかったら行ってください」と。治つてくると今度は逆に楽しいから行く。紋切り型の指導をしてもその患者さんに響かなければそれは何の意味もない。だから、こういうコミュニケーションが大事なんです。

三年か四年前まで非常に大変でした。というの、ちよつと落とし穴にはまって、来た患者さんを治さなきゃいけないっていう使命感に燃えてた時もあるんですよ。そのうち自分もちよつとしんどなってきたんですよ。治らない患者さんもいらつしやる。そして治つたことを強要して「大丈夫でしょ、大丈夫でしょ」って言うような自分の癖が出てくる。患者さんもおべんちやから「だいたい良くなりました」って言うけど、そんなによくなっていないわけですよ。

でも三年くらい前にちよつと吹っ切れたんです。「この人は絶対治らんわ」と思いまして。患者さんが来られていろいろ話して、

最後に「先生私は治るでしょうか」って言うから「治らないと思います。治らないと思いますけど、少しは楽にはしてあげられます。これはあなたの性格に起因するもんだから治しようがありません。ただ、眠れなくて辛いのは取ってあげることでは」と聞き直つたときからすごい楽になりました。治さなくていいんだって。究極の考え方ですよ。そうすると肩の力がぬけて無理な姿勢がない。それで患者さんもちよつと安心する。

「非常に辛い場合は、それを取り除くのがほくの責任です。でもその次は自分で考えないと駄目です」例えば、良くなったらまたバリバリ仕事を始める、するとまた調子が悪くなる。これは当然のことやから、「人に負けないって気持ちをちよつと押さえて、二番手、三番手を走るくらいの気持ちにしましょうよ。あなたを一番手に走らせるような治療はしたくない。二番手三番手でいいよっていつまでお付き合いしましょう」そうすると完全に薬はいらなくなるでしょう。二ヶ月くらいで大体ほとくの仕事は終わって、「その後の治療はあなたの仕事だから。だけど見捨てはせんから、ほちほち来はつたらどうですか」と。薬が全くなしても二ヶ月に一回来られる方がいらつしやって、そうすると体調がいいし、ペースがつかめるし、いろんなことを聞いてもらえればいいんだって思ってくるんです。多くの医師や市民が余裕を持ってお話を聞けるようになれば、困ってる方は随分減ってくると思いますけどね。

—— こういうところに宗教関係者の方々が関わ

りになられるのは大事なことだと思います。医者にかかるほどじゃないけど悩みごとを打ち明け、さらけだすためには相手がいりますからね。こういうことはひよつとしたら昔は宗教の大きな役割やなかったんでしょうか。こんなん言うたら悪いですけど宗教が中に閉じこもって社会との接触があまりないからじゃないですか。うちにも宗教関係者の方が来てますけど、周りからは見られるし、ものすごいきつちりしてないと非常にきついですよ。そこに不安障害が出てくると大変なんです。一回崩れ始めると、みんなの前で話すことが多いから非常に辛いみたいです。どうしても医者とか坊主とか教師だとまず職業が先にきちゃって個々の人間があとにくるんでね。やっぱりみんなの見る目は偉い人だつていう先入観があるから、そこを変えていかなきゃいけないと思います。

あと、女性の問題の裏にはかなり男性の問題が絡んでるんですよ。女性が苦しめるのは非常に理解できるけど、女性のことだけを考えていても解決しないこともある。その裏の男性の問題をなんとかしないといけない。うちでは男性の問題を何とかするの女性の問題も解決しやすいんですね。そのところがあって、女性の問題というと女性しか見てないので、ちよつと男性の方を振り向いたらどうですかとほくは思います。

—— 先生ありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。

そもそも下帯をつけない伝統行事の是非へと発展していった。いずれも、伝統を守る側が、現代の時代変化をとらえ切れずに、何がなんでも形式的に伝統を守ることに固執したことが問われたという見方もできる。

こちら当初は、「裸になるのは生まれたままの清い姿を神仏に示すため、騒動を機に、伝統文化を後世に引き継ぐ大切さを知ってもらいたい」としていたが、事態は、「形を変えても続けるか、形が変わる前にやめるか、ポスター騒動どころか運営自体が綱渡り」ということになっていった。

二つとも、たとえ伝統的な行事であっても、時代の流れのなかでそのあり方が問われることを示した事件である。こうした事件を通じて考えさせられることは、伝統というのはひたすらこれまでのスタイルを墨守することではなく、本当にそのよさを守るためには、伝統に今流の解釈を与えてよいものを残す努力をするということである。

逆の言い方をすれば、伝統の存続を真に願うのであればあるほど、

そのあり方を問い、見つめ直していく姿勢が求められるということではないだろうか。

4 時代が変わり、価値観が変わる

セクハラが社会問題化した時も、「そんなことを言い立てると人間関係がギスギスする」とか「それはコミュニケーションの一種だ」などとして、これまでの男性中心の職場の伝統を頑なに守ろうとする人たちが大勢いた。

その人たちの言い分も、「お酒の上で触られるくらいは我慢しろ」「いろいろ言われるうちが花なんだ」などとしながら、自らの逸脱行為を正当化しようとしたが、それができなかった。

時代が変わり、常識が変わる時には、必ず価値観の衝突が起きるのは常である。しかし、本当によき伝統を残したいのであれば、時代に逆らって従来のやり方に固執するのではなく、新たな視点で伝統を見直すことであることを今回の事件は、教えているといえないだろうか。

私たちは長い間、男性中心の社会を生きてきた。そして、そうした男性が中心になって作り上げてきた社会には、無意識であれ、男性にとって都合のよい仕組みや考え方を土台として、それを常識としてきた部分が多く含まれている。

それが伝統やしきたりとして、誰もが疑うことが許されない部分を生み出してきたのだとも言える。男性も女性も共に生きやすい社会を目指すということは、こうした伝統への異議申し立てに寛容であるということがスタートラインとなる。

※1 なまはげ事件

秋田県男鹿市の旅館で昨年12月31日、男鹿半島の伝統行事である「なまはげ」が女性風呂へ侵入し、入浴中の女性数人の体を触る騒動が起こった。「なまはげ」は、鬼のような装束に扮して家々を回り、子供たちに礼儀の大切さを教えるという行事で、国の重要無形民俗文化財にもなっている。

※2 蘇民祭

岩手県を中心に日本各地に伝わる裸祭り。1000年以上の歴史を持ち、国の選択無形民族文化財にも選択されている。今年、裸姿のポスターが「客に不快感を与える」として、JPR東日本に掲載を拒否されたことで話題となった。



【プロフィール】 かねこ まさおみ

略歴／元東京都職員、産業労働局などの勤務を経て、現在、「ガバナンス」「労働法研究会報」「月刊連合」「月刊地方自治職員研修」などに連載執筆中。セクハラ、パワハラ、ホームレス、リストラ、フリーター、職場のいじめ問題などの職場ルボを各種雑誌に執筆。

主な著書／

・セクハラ関係

「公務員のセクハラ防止マニュアル」(ぎょうせい '98)

「事例・判例でみるセクハラ対策」(築地書館 '99)

「裁かれる男たち」(明石書店 '01)

「壊れる男たち」(岩波新書 '06)

・現代職場事情

「ホームレスになった一大都会を漂うー」(ちくま文庫 '01)

「パワーハラスメントの衝撃」(都政新報社 '03)

「知っていますか? パワーハラスメント一問一答」(解放出版社 '04)

「部下を壊す上司たち」(PHP 出版 '08)

伝統と苦情

～なまはげ事件の教訓～

1 伝統が問われる

秋田のなまはげ^(※1)、岩手の蘇民祭^(※2)など、相次いで伝統行事の是非が社会問題化して話題になった。それぞれ取り上げられることになったきっかけは違ったが、伝統行事のあり方を問い直すという点では共通した問題だったといってもいいだろう。

何でもかんでも、新しいものを受け入れて、古いものを否定してしまう風潮にも賛成できないが、その一方で、伝統行事ということだけで頑なにこれまでのやり方を守ることを優先してしまう姿勢にも大きな疑問を感じさせることになった事件だった。

なまはげ問題の推移などは、まさしく伝統を守ろうとすることが優先されるあまりに、問題点を掴み損ねた対応が繰り返されてしまった事例の典型といえるだろう。当初は、「昔は旅館で女学生の身体に触っても文句はでなかった」という主張がされて、むしろ、これらの逸脱を含めて伝統と受け止められない方が

悪いという言い方がされた。

地元では「多少の逸脱が見られたとしても、それが伝統行事なんだから」という伝統を守れ方式の意見が強かった。だから、そんな流れで、一時は、「行事の性質上、なまはげがお客様の身体に触れる場合があります」という警告文書を出せばいいのだという議論さえも生んだ。つまり、今流で言えばセクハラまがいのことはこれまでもあったし、それは容認されてきたのだからいいんだという伝統主義の立場があった。まさに、伝統なんだから、無条件に受け入れられるべきであるという安易な意見だった。

2 苦情に押されて

しかし、そうした安易な主張に対して市の観光課などへの深刻な被害の訴えが続出して、状況が変わった。それでも、「そうした行為は一部の連中の問題で、本来の趣旨とは違う」という強弁を繰り返したことによって、ますます苦情を拡大させることになった。

市には苦情が殺到し、男鹿署も

苦情の事実確認をすることで、市はホームページで謝罪せざるを得なくなった。そして、市は地元の町内会と協議会を設けて、再発防止のための行動指針を作ることへと態度を変えた。

つまり、苦情と世論に押し切られる形で、結局は伝統行事を守るためにはどうしたらいいのかという議論をせざるを得なくなっていくのである。これまでのやり方を頭からは認めるのではなく、そうした逸脱行為をさせないため、最終的には「暴れかた」の指針を作成した。

誰が考えても、現代では「女性のお風呂に入りこんだり、身体に触ってなにが悪い」などとはいえないし、自らの逸脱行為を許容するように、警告文書を出すことで済まそうという開き直りの対応が許されるはずがない。そうした安易な姿勢を繰り返したことが、かえって祭の存続を危うくしてしまったのである。

3 あり方を問い直す

一方の蘇民祭の方も胸毛のポスターの是非からはじまった議論が、

REPORT
報告

男女両性で形づくる 教団をめざす協議会

[2007.10.31]

2007年10月31日、「男女両性で形づくる教団をめざす協議会」を開催しました。この協議会にはこれまで女性室公開講座を開催した教区とすでに性別に関する委員会が設置されている教区、あわせて14教区が参加しました。

この度の協議会は、性別の課題を共有することの難しさ

の原因はどこにあるのか、克服していくためにはどういうことが考えられるかについて徹底的に討論しようということが中心テーマでした。

協議会では組織や機構の抱える問題や坊守制度に関する問題、また男女平等参画に対する意識の問題について活発に意見が交わされました。



参加者の
声

・男女平等参画を教区全体で取り組むためには、様々な立場の人で構成される委員会が必要ではないか。また、教化委員会全体で男女平等参画を課題にすべきではないか。

・協議会に出席するたびに女性の声を届けているが、機構制度になかなか反映していないので歯がゆい思いがする。

・坊守会で男女平等参画について考える様々な会を開いても、なかなか男性を取り込んでいけない。坊守会と性差別について考える会とはリンクしそうでできない状況がある。

・教区会は選挙権も被選挙権も住職にしかない。制度の改革が必要なのではないか。

・男女平等参画の意識をもって御遠忌の推進機関を設置、運営してほしい。

・色々な会議において出席者をもっと男女均等にすべき。女性も最初はしんどいが成長できる。その機会を奪わないで広げていってほしいと思う。

OPINION

1.

組織・機構制度
に関すること

OPINION

2.

坊守の位置付け
に関すること

・坊守の位置付けについては門徒から見れば狭い問題に思われるかもしれないが、これは宗門で男女平等参画をどう捉えているのかが問われる重要な問題。一人ひとりが考えていかななくてはならない。継続して自分のところで話し合っていきたい。

・九州連区では、坊守会で坊守問題の学習会があり、制度だけではなく性差別の問題から捉える視点で話し合った。

・親鸞聖人も結婚されたように、私たちも結婚をして住職・坊守でお寺をやっていくのが当たり前という意識が強い。多様な生き方を認めて、共に歩んでいくという方向性があれば、住職の配偶者にこだわる必要はないのではないか。

※熊本教区より
「坊守の歩み—坊守制度問題資料集—」
(2008年4月1日)が発刊されました。

OPINION

3.

男女平等参画に対する 意識に関すること

・既存の制度に組み込まれた女性住職は孤立しがちである。男性が作った仕組みに女性を入れてやるという意識があるのではないか。

・同朋会運動を進めることは宗門自体が変わっていくことであり、男女両性がどう参画していくのかは大きな問題である。

・教化委員で女性の候補がなかなか見つからない。委員になっても出てこない人がいて、女性も自分の意見を言えるようにならないといけない。

・同朋会運動といっても寺と門徒の関係をどうしていくのかということばかりで、男女の関係についての視点がなかった。

・参議会議員に女性が参画するのは今のシステムではなかなか難しい。門徒会員を推薦する時には、男女両性で形づくる教団の願いに立って、住職が女性を選ぶように意識することが必要である。



OPINION

4.

今後の

取り組み方

について

・女性の進出を促すなら、門徒会員は男女同数で選出すべき。

・現実問題として小さな子どもがいる場合、若い世代の人が参加するのは難しい。女性の委員を増やすためには、会議の持ち方や時間などの工夫や配慮が必要だ。

・男女といっても親鸞と恵信尼というだけでなく、親子ということも考えなくてはならない。単に夫婦だけの関係ではなく、家族のあり方が女性を縛る要因になっていたりする。そのことを踏まえた上で、協議会を開いていきたい。

・性差別に関する研修は、自分自身に問題意識がないと参加しない、聞けないということがある。だからいかにして課題を共有していくのか、やり方を見直していく必要がある。

・この協議会で出された問題点や要望は、内局や教務所長にただ伝えるだけではなく、継続した呼応関係が必要だ。

・制度上には女性を排除する文言はないけれども、現状は厳しいものがある。もっと教区単位で男女平等参画について考え、教区としての声を本山に伝えていかなければならない。

・宗務役員と共通認識を持つことが重要である。教務所員とともに性差別について学ぶ場が必要ではないか。

・男女平等参画という課題は全教区あげて取り組むべきものなので、公開講座を開いた教区だけでなく、全教区に働きかけていけるような方法を考えていかなくてはならない。連区単位で協議会や研修ができないだろうか。

おわりに

■協議会では参加者から女性室としての今後の取り組みについてもさまざまな提案が出され、とても励まされた思いがします。協議会の声を受け女性室では、教学研究や宗務所の各部所との連携をさらに深め、男女両性で形づくる教団に向けたより具体的な方途を探るとともに、宗祖の御遠忌を視野に入れた提案などを含め、課題の共有に向けたはたらきかけを進めていきたいと思えます。

「楽しく仏法を語り合おう」

はった まやこ
八田 摩矢子

三条教区第17組浄福寺

『正信偈』を声明する度、意味を聞かれる度に、参考書や仏教用語を辞書引きした言葉では、知っている気になっただけで、私自身の事として受け止められないことに苛立ちを感じていた。

『蓮如上人御一代記聞書』（以下『聞書』）二二九条に「燈台本くらし」というように、仏法がいつも聴聞できる人は、いつもの事と思ひ、ご縁をいただきながらも聞法がおろそかになっている」とあり、我が身の事を言われているように感じた。自坊の法話の時は聴聞し、女性がほとんど参加していないため最初は肩身が狭い思いをしたが、教区の安居や学習会・講座にも参加した。

『聞書』二二六条に「好きなことは何度ももつと聞きたいと思うように、仏法の事も、知っても知ってももつと良く聞きたいと思うものである」とあるように、仏法は生活に密着しており自分自身の事として捉えると、自分の弱さや

傲慢さに気がつかされ、やがてもつと知りたいたいと感じるようになった。住職方の中で地位や年齢、性別を超えて御同朋として聞法させていただいているという思いが強くなった。

教区の研修会のスタッフとして、私へ投げかけられた問いは、「平座で男女が平等に聞法できる場になっっているか」であった。門徒との法要等では、男性が中心に法話を聴き、女性は裏方の仕事をする。住職が法話をしている間は、坊守が裏方の仕事をする。世話方は男性の名前が並び、お彼岸等はおばあちゃん方がお寺参りをする。それぞれの役割としてあたりまえに思っていた。男女平等と聞くと、権利や地位の平等の獲得や男性対女性の対立のイメージがあった。僧俗関係なく話し合う中で、坊守問題が挙げられると、寺院中心の権利主張のための平等なのかという思いと、精神的な面での平等を訴えているのかという葛藤があった。

『聞書』二八八条を、「仏法者の近くについて、

〈エッセイ〉

女のささやき

いつも仏法を聴聞して、役割を忘れ法話を聞くことができれば、仏なるであろう。有り難いことである」といただくならば、住職・坊守等の役割を忘れ、仏法を聴聞しているのか、仏法のお仕事を有り難いことと感じ、本当に聞法する身となっっているか、問われている気がした。

仏法の身近で仕事をさせていたたくご縁の有り難さや、仏法を語りあう楽しさに気付いたならば、役割・役職・性別・年齢を超えて、仏道を歩む御同朋・御同行として生活する場が、平座で男女が平等に聞法できる場となるのではないでしようか。

私は、役割・性別・年齢等を超えて、御同朋として仏法を語りあえる事が楽しくて仕方がない。同じ事を何度聞いても新しい発見があり、話が尽きない。

仏法を語り合っつて本当に楽しい!! と思いませんか。

合掌



坊守の規定がかわりました

宗務審議会「坊守の位置付けに関する委員会」からの「答申」(「真宗」5月号参照)をつけて、先の宗会で「寺院教会条例の一部を改正する条例」が可決され、坊守に関する規定が変更されました。

〈変更前〉 → 〈変更後〉

<p>住職の配偶者 (女性住職の配偶者は除く)</p>	<p>〈定義〉</p> <p>①住職の配偶者 (男性配偶者も対象) ②20歳以上の寺族から (配偶者がいない場合)</p>
<p>住職の退任又は死亡と同時</p>	<p>〈退任〉</p> <p>①後任の住職が任命されたとき ②住職の婚姻などにより 後任の坊守が就任したとき</p>
<p>住職の職務の本義を領解して、住職とともに教法を聞信し、所属門徒との交流を緊密にして、寺院又は教会の興隆発展に努めなければならない</p>	<p>〈任務〉</p> <p>住職又は教会主管者とともに門徒の教化に携わるため得度式を受けるとし、教法を聞信し、門徒との交流を緊密にして、寺院又は教会の興隆発展に努めなければならない</p>

◎変更のポイント

- 1, 性別による制限がなくなり、男性の坊守(女性の住職の配偶者)が認められることとなります。
- 2, これまでは、住職の退任もしくは死亡により、直ちに坊守も前坊守となりましたが、次の住職・教会主管者が任命されるまでは坊守となります。
- 3, 住職の配偶者がいない場合、20歳以上の寺族の中からふさわしい人を坊守とすることができます。
- 4, 教化に携わるため得度式を受けることが坊守の任務となりました。ただし、得度式を受けていない者は坊守になれないというものはありません。

寺院教会条例の一部を改正する条例

(定義)

第二十条 住職又は教会主管者の配偶者を、坊守と称する。

2 住職又は教会主管者が欠けた場合であっても、その配偶者であった者は、新たに住職又は教会主管者が就任するまでの間、坊守と称する。

3 住職又は教会主管者に配偶者がいない場合であって、特に必要があるときは、満二十歳以上の寺族の中から選定した者を坊守と称することができる。

4 前任の坊守は、前坊守と称する。

(任務)

第二十二條 坊守は、住職又は教会主管者とともに門徒の教化に携わるため得度式を受けるとし、教法を聞信し、門徒との交流を緊密にして、寺院又は教会の興隆発展に努めなければならない。

附則

この条例は、二〇〇八年七月一日から施行する。

※ 第二十一条(坊守籍簿)は従来のとおりです。

今後の方向として

今回の宗務審議会「坊守の位置付けに関する委員会」は、「坊守の規定について、早急に一定の結論を導き出す」ため、指針1「門徒同朋に開かれた間法道場としての寺院運営をめざして」と指針2「男女両性で形づくる教団をめざして」という課題と区分して議論されました。これについて宗門の中で様々な受け止めがあると思います。

また、答申には「今後も、課題と状況に応じて積極的な検討の機会が設けられ、歩みが止まることのない」ことが要請されています。

女性室では次号に向けて、「男女両性で形づくる教団」という視点から、あらためて変更の意味や課題について協議し、宗門の男女の関係と女性の宗門活動への参画のありかたを探りたいと思います。

女性室に皆さんの声を
お寄せください!

『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしよう。

日々の生活にあつて、わたしたちが“生きる”ということを考えてとき、それは、いろいろな人と声をかけあつてこそ“生きる”ということがなりたつていくといつても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかつたり、行き違つたり、そのためにいろいろな出会いをしているながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによつて、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思ひます。

女性室活動報告

【スタッフ派遣】

（2007年）

12月12日 真宗大谷派全国仏教青年同盟
「愛と性に学ぶワークショップ」への参加

12月21日 女性と仏教 東海ネットワークへの参加

（2008年）

1月18日 女性室公開講座日豊会場 事前スタッフ会への参加

2月6日 女性室公開講座山形会場 講師との事前打合せへの参加

3月7日 『メンズあいあう』第3号発行に向けて石蔵氏にインタビュー

3月11日 鹿児島教区「女性問題（性差別）についての学習会」への参加

3月11日 女性室公開講座山形会場 事前スタッフ会への参加

3月17日 女性室公開講座日豊会場 講師との事前スタッフ会への参加

3月26日 福井教区「思い込みから解放されていきいき人生」学習会への参加

4月23日 大垣教区「おとことおんなのはじめの一步」学習会への参加

5月1日 女性室公開講座日豊会場 事前スタッフ会への参加

5月3～4日 メンズカウンセリング講座への参加

5月24日 日本フェミニストカウンセリング学会全国大会への参加

5月30日 高田教区「えん（縁・円・炎）の会」公開講座への参加

6月1日 三条教区「共にといえる人生講座」への参加

【公開講座】

5月15日 日豊会場

会場：日豊教務所

講師：山内小夜子さん

テーマ：私たちのきせき 近代にタイムトラベル
—本当の生き方を見失わないために—

6月7日 山形会場

会場：大手門バズ

講師：天野正子さん

テーマ：みとめあい わかちあい そだちあう 女と男
—「女・男」そして「家族」—

【第9回女性会議】

4月21日～22日

会場：真宗本願研修道場

講師：菱木政晴さん

テーマ：「真宗と人権」

—同期会運動が見失ってきたもの—

new staff member

新スタッフ紹介

「三人目の子どもが産まれた今、あらためて燃えるような熱い恋愛がしたいねえ」などと妻と会話する新婚(?)八年目の春。浄土真宗は「愛(欲)という煩惱」を関係性の中で学ぶことができる仏教であることがありがたい。

妻との「燃えるような恋愛作戦」第一弾は「編み物」。昨年末から、地元の毛糸屋さんと、物品を購入すれば無料で教えてもらえるとのことと始めました。移動中の新幹線、いきつけの喫茶店、はたまた各種委員会の合間に寸暇を惜しんで編んでいると、周囲の反応が面白い。およそ、少数の「奥さん愛してますね」、大多数の「男のクセに編み物なんて!」という意見に二分されます。

「編み物」は、ところかわれば猟師や船乗りが、獣脂をたっぷり含んだ毛糸で編んだ「男の手作業」による「男の労働着」だったりします。知り合いの女性は「子どものころ、うちでは父がセーターとかマフラーを編んでくれたのよ」と言ってくれたり。

私自身、以前は「お婆ちゃんが暖炉の前でするもの」とか「少女が憧れの先輩とか彼氏にするもの」程度にしか考えていませんでした。「編み物」ひとつとっても、ずいぶん女と男にまつわる時代社会の「妄想顛倒」に翻弄されているんだなあ、と実感。編み物に象徴されるような「日常生活や、隣に生きる人との関係を大切にしたい」という意欲は女のもの?男のもの?いったい誰のものなのでしょう。

このたび、女性室スタッフとなりましたつちやよしふみと申します。よろしく!

(つちやよしふみ)

the editor's notes

編集後記

◆石蔵先生のお話をお聞きして「蚕繭自縛」という文字が頭に浮かんだ。蚕が自らの吐いた糸によって繭に閉じこもるように、知らず知らず自分に閉じ込め、身動き取れなくなっていく男性たち。そこにある目に見えない「男らしさ」という糸を少しでも解きほぐしたいと、今回の特集を組んだ。

また今回、「坊守の位置付け」について一つの動きがあった。しかし、本当に問うべきは「住職の位置」と男たちの生き様なのではないだろうか。

(本多祐徹)